

## 私の原動力

武田薬品工業株式会社 北関東支店  
長谷川 龍晴

「あなたはいったいこの子にどういった教育をしているの？」

新人の私と同行していた上司が医師に言われた言葉を今でもよく思い出します。今から13年前、研修期間を終え営業所に配属となった私はMRという仕事に就いたものの「医療の一端を担う」ことへの認識がまだ薄く、医薬情報担当者の名の如く医師、薬剤師に単に情報を提供することが使命とばかりに、自社製品の情報を携えて意気揚々と担当病院への訪問を繰り返していました。

そんなある日、医師より降圧剤における肝機能への影響を教えてほしいとの連絡があり、早速、副作用情報や文献等の資料を取り揃えて病院に向かいました。しかしその医師が不在だったため、資料を机の上に置いてそのまま帰社しました。翌日、医師より上司を連れて来てほしいとの電話があり、すぐさま上司と共に訪問をしたところ、面接するやいなや叱られることとなったのです。私の思惑とはまったく異なる出来事でした。今思えばまったく恥ずかしい話ですが、私は「先生にお礼でも言ってもらえるのかな」などと思って病院へ向かったくらいで、なぜ怒っているのかまったく解からず、あっけにと取られていたことを覚えています。叱られている最中も「情報伝達が遅れたわけでもないのになぜ叱られるのか。」ただひたすらそのことだけが頭を巡っていました。

医薬品は、情報を伴わなければ単なる化学物質にすぎず、情報をもって初めて医薬品として成り立つ。ゆえに医師、薬剤師に対し正確な情報をより早く伝達することは重要である。そのことは十分理解していたし、またそれを実践することでMRの職務を全うしている、仕事をこなしている、とっていた私には衝撃的な出来事でした。

帰りの車の中で上司から「薬って誰が使っていると思う？」との質問がありました。「医師、薬剤師です。だから僕らMRが情報を提供しているのではないですか。」と憚然としている私に上司は「違うよ、使っているのは患者さんだよ。」と静かに言いました。「その意味をよく考えて明日もう一度先生のところに行ってください。」

医師そして上司の言葉を思い出してみました。「文献だけを置いていくならMRはいらない。」「情報の入手だけなら、インターネットからでもできる。」そして「使っているのは患者さん。」

翌日、再度医師のところへ訪問しました。お詫び、そして患者さんの状況を把握する為に……。降圧剤を投与された患者さんの様態はどうか、詳細を尋ねた私に対して「やっとそれを聞いてくれましたか。」と医師は笑顔で話してくださいました。医師は、自分の患者さんの状況を話し、それに合った的確な情報を伝達してほしかったのです。しかし、会話もなく資料だけ残しその場を立ち去った私が許せなかったのです。

まったく同じ薬でも服用する患者さんによって、その効果や副作用も千差万別です。私は肝機能という文字だけをとって、データベースから文献等の検索を行い、勝手な判断で一方向的に情報を提供したに過ぎませんでした。MRから医師、薬剤師に

情報を提供することで仕事を完結させており、そこにはまったく患者さんの姿が見えていなかったのです。しかし、医師、薬剤師が患者さんを前にどんな情報を必要としているかを把握し、これに応えることが大切であると気づきました。すべては患者さんのために…。私が「医療の一端を担う」という言葉を少し理解できた出来事となりました。

その後、成人病が生活習慣病と呼ばれ始めたころ、同先生より「生活習慣病は予防できるという認識を広めることを目的として導入されるようになった言葉です。そういった意味からも、市民公開講座を開催したいと考えています。一緒にやりませんか。」と話を持ちかけられました。患者さんと接するいい機会であると考え、市民公開講座の立ち上げに協力しました。マルチケアフォーラムと題して開催された市民公開講座には予想以上の人が集まりました。そこには病気と向き合い、真剣な眼差しで講演を聴いている人々の姿があり、非常に印象的でした。また、「ありがとうございました、大変勉強になりました。」と笑顔で帰る人々を見て、自分自身が笑顔のために働いていることを実感し、笑顔を作り出せるこの仕事にやりがいを感じました。

病気を治すためには薬が必要ですが、人の笑顔は薬だけで作れるものではありません。医師、薬剤師、看護師その他多くの人々の協力により医療はなりたち、そこから笑顔が生まれるのです。そして、その一端をMRが担っているのです。

今でも、市民公開講座で見た患者さんの真剣な眼差しと笑顔が思い出されます。少しでも多くの患者さんに笑顔になってほしい、その為にMRとしてチーム医療に貢献したい。これが私の仕事の原動力です。 (MR経験 18年)